

【文献紹介】

渡辺京二 『逝きし世の面影』

(平凡社ライブラリー552、2005)

大串 兎 紀 夫

本書は、わが国が欧米世界にふれ近代化することによって失った、幕末・明治初期の日本の文明の姿を明らかにしようという意図でまとめられたものである。著者は、その方法として、当時、わが国を訪れた外国人たち（主として欧米人）の残した膨大な記録、文献を丹念に探り、精査し、そこから、かつての日本人の多彩な生き方、現在では忘れられているように見える—だから著者は“逝きし世の面影”といているのだが—失った姿を明らかにし、それが持っていたことの意味を現在の時点で問い直そうとしている。その際、イデオロギーや先入観にとらわれないことを旨としており、教科書などに描かれたステレオタイプの日本人像とは違った、われわれの祖先たちの実際の姿を描き出そうとしている。

教育基本法によって「わが国の伝統と文化を知り、継承する」ことが必須となった現在、教育に携わる者にとって必読書であると考え、すでに広く読まれているものではあるがここに紹介したい。

著者は、昭和5年（1930）生まれ、九州に住む在野の思想史家であり、本書も、はじめ平成10年（1998）に福岡の出版社から発行されたが、発行部数も少なく全国的にはあまり知られていなかった。それが平成17年（2005）に、平凡社ライブラリーとして発行されることで、研究者ばかりでなく、日本文化に興味を持つ多方面の人々から高く評価されるようになった。

本書は600ページ超の大部で、内容も多岐にわたるが、概略紹介すると「第一章 ある文明の幻影」で、“日本文化論の通弊に対する疑問”として、“日

本の知識人にはこの種の欧米人の見聞記を美化された幻影として斥けたいという、強い衝動に動かされて来た歴史がある”（20ページ）として、具体的に例を挙げて“こういう西洋人の日本に関する印象を、単なる異国趣味が生んだ幻影としか受けとってこなかったところに、実はわれわれの日本近代史読解の盲点と貧しさがあったのだ”と断じ、むしろ“彼らが日本という異文化との遭遇において経験したのは、近代以前の人間の生活様式という普遍的な主題だった”（59ページ）として、記録をありのままに追体験し、再吟味する方法をとると述べている。

そして、「第二章 陽気な人々」以下、「簡素と豊かさ」「親和と礼節」「雑多と充溢」「労働と身体」「自由と身分」「裸体と性」「女の位相」「子どもの楽園」「風景とコスモス」「生類とコスモス」「信仰と祭り」「心の垣根」まで、全14章にわたって、多彩な観点から膨大な記録を縦横に引用して詳述している。

この多彩な内容を紹介するのは紙幅からして不可能であり、実際にお読みいただくしかないが、わたくしが、最も興味深く呼んだ「子どもの楽園」について、少し紹介する。

まず“モースは言う。「私は日本が子どもの天国であることをくりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子供のために深い注意が払われる国はない。ニコニコしているところから判断すると、子供達は朝から晩まで幸福であるらしい。」”（390ページ）“カッテンディーゲは長崎での見聞から日本の幼児教育はルソーが「エミール」で主張するところとよく似ている”（392ページ）など多くの例をあげて詳しく観察・記録された当時の子どもの状況、大人との関係や育児・しつけについて紹介した上で、これらの見方について日本人の学者が“過褒”だとか“児童虐待の例”を挙げて否定的に述べていることに対し、“まったく筋違いの論議”であるとしている（420～421ページ）。この例でも伺えるように、近・現代のわが国の学術論文を含めて日本文化、歴史、社会などについての通説にとらわれず、素直に過去を振り返ろうとしている。

私は、本書を熟読することで、日本文化、日本人の本来もっていた姿に気付くとともに、改めて、現代のわれわれが日本文化、日本人をどのように見て、

どのように進んでいくべきかを考える一つのきっかけになった。一読をお勧めしたい。

関連して、近年の教育、学習、人間形成の面でのわが国の特色を実際に理解するうえで私が大いに参考になったものとして、アメリカとの比較で考察している「育児・しつけ」分野の、東洋『日本人のしつけと教育～発達の日米比較にもとづいて』（東京大学出版会、1994）と、「学校教育」分野の、恒吉遼子『人間形成の日米比較～かくれたカリキュラム』（中公新書1065、1992）が多くの示唆に富んでいる。

また、辻本雅史『「学び」の復権—模倣と習熟』（角川書店、1999）は、江戸時代—近代学校制度が普及する以前のわが国の教育制度の特色を、「手習い塾」「学問塾」などを例に儒学者貝原益軒の教育観を中心に述べて、現代の教育問題の解決の参考になると主張しており、合わせてこれらを参照していただければ幸いである。